異質な言語との関係 ― ドイツと日本の翻訳思想

翻訳における複合的な非対称的力学のための序論的考察

山口裕之

1.

翻訳が単に言語の転換の問題ではなく、二つの言語にかかわる文化そのものの移動の問題として考えられるようになるのは、確固としたディシプリンとしてのトランスレーション・スタディーズのかなり短めの歴史のなかでも、いまからみれば、意外なほど最近のことに属する[1]。スーザン・バスネットとアンドレ・ルフェーブルによる 1990 年の論集 *Translation, History and Culture*[2] は、そういった方向性を明確に示した最も重要な出版物の一つだが、その序文のサブタイトルとして掲げられている「トランスレーション・スタディーズにおける〈文化的転回（カルチュラル・ターン）〉」がこれほど遅い時点にまでもちこされてしまったのは、翻訳の「科学的」研究の立場を明確に打ち出していった翻訳学が、一定の期間、とりわけ言語学の領域における機能主義的な分析において展開していったこととも無関係というわけではないだろう。先に言及した序文のなかで、二人の編者は言語学における翻訳学の傾向に対して不満と批判を隠さない。機械翻訳の研究が進みつつある現状と、それにともなって正確なプログラムが必要になるという状況に言及したあと次のように続ける。「したがって、等価性と〈保証〉があのように強調され、そして長期間にわたってほとんどそれだけといってよいほど、翻訳の単位として語に焦点が当てられてきたのだ。後になって、言語学者たちは翻訳の単位を語からテクストに移していったが、しかしそれをさらに越えていくことはなかった。」つまり、「文化」というコンテクストにまでいたることはなかったということだ。「さらに、彼らが翻訳について書いてきたことは、決して文学翻訳にまで適用することを意図していないとまで主張しようとする。なぜなら、彼らの主張によると、文学は〈特殊なケース〉だからだ。」[3]

この「転回」はもちろん、翻訳学の流れのなかできわめて重要な一歩となっている。しかし、異なる文化を横断する翻訳という視点は、文化の異質性という翻訳行為の根本的な

1　このことは、次に言及するバスネット／ルフェーブルの論集よりももっと早い段階の、例えば Gideon Toury, The Nature and Role of Norms in Literary Translation, in: Laurence Venuti (ed.), *The Translation Studies Reader*, 3rd edition, London and New York: Routledge, 2012, pp. 168-181. のようなテクストにまで遡ることもできるだろう。いずれにしても、比較的最近のことであることはまちがいない。

2　*Translation, History and Culture*. Edited by Susan Bassnett and André Lefevere. Cassell, 1995 (Paperback Edition).

3　Ibid. p. 4. ちなみに、ジェレミー・マンデイもこの論集を Cultural and ideological turns (chapter 8) の出発点の一つとして位置づけている。Jeremy Munday, *Introducing Translation Studies. Theories and Applications*, 3rd edition, Routledge, 2012, p. 192.（ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳、みすず書房、2009 年、196 頁。）

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

前提条件を指摘しているにとどまっている。ほぼ対等な関係にある文化が互いに異なるものである場合にはそれでもよい。しかし、二つの文化のあいだに政治的・歴史的な力の場が強力に作用することによって、支配・従属の関係が顕在的・潜在的に存在するとき、翻訳という行為の場で生じていることを分析するまなざしは、文化の異質性という前提条件そのものであるよりも、むしろ二つの異なる文化間にはたらく力の場の構造に向けられる必要がある。「ポストコロニアル的翻訳理論」という言葉によって総称されるこの立場は、「文化的転回」をそもそも前提としているが、その言説が次々と生み出されていくのは、「文化的転回」にかかわる理論家たちの研究とほぼ同じ時期のことだった。（さきに言及した 1990 年の論集にも、ポストコロニアリズム的な視点からのタゴールの翻訳にかかわる研究が含まれている[4]。）とりわけ有名なスピヴァクの「翻訳の政治学」が最初に発表されたのは 1993 年、そしてこの時期のきわめて重要なニランジャナの著作 *Siting Translation: History, Post-structuralism, and the Colonial Context* が出版されたのは 1992 年である[5]。それとともに、影響力の大きさという点でいえば、ローレンス・ヴェヌーティの *The Translator's Invisibility*（初版は 1995 年）はこの流れのなかで大きな役割を演じているといえるだろう[6]。この著作は先鋭的なポストコロニアリズムの意識そのものが前面に出されているわけではないが、英語圏において「翻訳者が目に見えない存在となっている」という問題に批判的な光を当てるために導入された「異質化 (foreignizing/alienating)」および「同化的受容 (domesticating)」の翻訳という概念は、支配的文化と従属的文化のあいだの翻訳における力関係にかかわるものとして、研究者の注目を集めることになった。

2.

日本の近代化の過程において国家的な使命を帯びて決定的な役割を果たしてきた翻訳が、西洋とのあいだの歴然とした力関係のなかで展開してきたということはあらためて強調するまでもない。しかし、例えば 2010 年に編纂出版された『日本の翻訳論』[7] というアンソロジーのなかで大きな歴史的な流れのうちに俯瞰できる翻訳者や思想家たちの翻訳論を目にするとき、傾向として一貫して確認できるのは、西洋の諸言語と日本語のあいだの言語そのもののちがいにもとづく議論が支配的であるということだ。そこでは（自明の前提であるためか）力関係そのものがあらためて問われることはない。

同様の傾向は、ヨーロッパやアメリカの言語からの翻訳という行為が近代日本語の形成を決定的に規定していた時代だけでなく、西洋を範としてきた日本のまなざしを当然意識しつつ、現代の視点からこの時代の翻訳（理論）史や日本語形成を考察する際にも基本的

4　Mahasweta Sengupta, "Translation, Colonialism and Poetics: Rrabindranath Tagore in Two Worlds", in: Bassnett/Lefevere, *Translation, History and Culture*, pp. 56-63.

5　Gayatri Chakravorty Spivak, *Outside in the Teaching Machine*. Routledge, 1993, pp. 200-225 ("The Politics of Translation"); Venuti, Lawrence (ed.): *The Translation Studies Reader*. 3rd edition, Routledge, 2012, pp. 312-330; Tejaswini Niranjana, *Siting Translation: History, Post-structuralism, and the Colonial Context*, University of California Press, 1992.

6　Venuti, Lawrence: *The Translator's Invisibility. A History of Translation*. 2nd edition, Routledge, 2008.

7　柳父章・水野的・長沼美香子編『日本の翻訳論――アンソロジーと解題』法政大学出版局、2010 年。

に認められるのではないか。研究の対象とされてきたのは、それ自体としてはニュートラルな事情である言語や文化の差異、あるいは事実的なことがらとしての歴史的過程であって、言語や文化の差異のあいだで翻訳と日本語形成に対して力を発揮している非対称的構造による力学そのものは、意識されているにもかかわらず主題化されにくい状況にあり続けているようにみえる。例えば、『日本の翻訳論』のなかで、森田思軒や福沢諭吉の翻訳思想に対する解説として、ヴェヌーティの「異化」と「同化」という概念、さらにはヴェヌーティがそのためにとりあげたシュライアーマッハーの翻訳論に言及する際にも、そこでは論点が技術的特質としての「翻訳方略」の問題に見事なまでに還元され、ヴェヌーティの論議をもともと支えていたはずの文化間の力関係の問題は完全に消滅してしまっている[8]。

学問領域においても欧米の理論装置が圧倒的に支配的であるという文化帝国主義的状況は、ポストコロニアル的翻訳理論にとっては下手をすると自己矛盾を生み出しかねないということはおくとしても、1990 年代になってトランスレーション・スタディーズのなかでようやく前面に現れたポストコロニアリズム的な議論の視点を、それ以前の日本の翻訳論に求めるのはたしかにあまり意味がないことかもしれない。しかし、日本の翻訳史に対するポストコロニアル的な視点が希薄になる傾向が生じやすいのではないかということは、例えば、南アジア出身の翻訳理論研究者による数多くの研究がポストコロニアル翻訳研究のなかで際立っているという状況と対比するとき、顕著に浮かび上がってくるだろう[9]。

文化間の非対称的な関係をめぐる問題は、日本ではむしろ地域研究の方法論をめぐる論議と、ナショナリズムをめぐる思想史的研究において、明示的に意識化され主題とされてきた。1997 年に『日本思想という問題――翻訳と主体』というかたちで刊行された 1985 年から 1993 年にかけての酒井直樹の論考は、タイトルが表すとおり、「日本思想」と翻訳との関係をめぐるものであるが、その思考は、日本を対象地域とする（日本国外の）地域研究の方法論的・認識批判的意識に貫かれている。そのことは同じく 1997 年に『思想』において、酒井がともにアメリカで活動している日本研究者ハリー・ハルトゥーニアンと提示した論議のなかでも顕著に示されている[10]。酒井は、地域研究の主導者たちが資金確保に腐心するばかりで、自分のかかわる知の生産の構造に対する認識論的視点がそこには決定的に欠如しているという現状を指摘したうえで、知の編成を包括する構造を意識化し検証するイデオロギー批判的まなざしを地域研究に要請する。『日本思想という問題』で焦

8 『日本の翻訳論』84-86 頁、111-112 頁。

9 2010 年に立命館大学で行われた国際シンポジウムの報告書『日本における翻訳学の行方』（佐藤＝ロスベアグ・ナナ / 渡辺公三編、立命館大学生存学研究センター、2010 年）にも、こういった事情が反映されているように思われる。ちなみに、佐藤＝ロスベアグ／渡辺による「まえがき」では、佐藤＝ロスベアグが 2006 年に南アフリカで開催された翻訳研究の国際会議に参加した際に、「なぜ翻訳大国である日本で TS が盛んにならないのか」が他の日本からの参加者と話題になり、そのことがきっかけとなってこの 2010 年の京都での翻訳研究の国際会議へと結びついていったという経緯が紹介されている。ジェレミー・マンデイの『翻訳学入門』の日本語翻訳が出版されたのが 2009 年、『日本の翻訳論』が 2010 年に出版、その後、早川敦子『翻訳論とはなにか』彩流社、2013 年、モナ・ベイカー／ガブリエラ・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』（藤濤文子監修・編訳）研究社、1913 年の刊行という流れにも見てとれるように、日本では 2010 年の少し前くらいからトランスレーション・スタディーズの機運がようやく生まれてきたといえるだろう。

10 ハリー・ハルトゥーニアン／酒井直樹「＜対談＞日本研究と文化研究（カルチュラル・スタディーズ）」（岡崎晴輝訳）『思想』1997 年 7 月号、岩波書店、4-53 頁。これについては、山口裕之「地域研究としてのドイツ研究――認識論的機能についての試論」、『人文研究』大阪市立大学文学部、第 50 巻 12 分冊（1998 年）、157-176 頁も参照。

点を当てられている翻訳の問題は、一貫してこの意識に支えられたものということができるだろう。

3.

日本での翻訳研究の状況や傾向性は、それ自体が日本における翻訳をめぐる思想の特質を如実に示している。本研究はこれまで概観してきたような状況や視点を前提として、日本を関係の場の中心に据えた、翻訳における文化的・政治的力学の分析を企図している。ただし、例えば酒井直樹の著作のなかでもあらためて強調されているように、近代化以降の「日本思想」に対しては、その対照項としてつねに「西洋」が想定されてきたわけだが[11]、ここではそのような「日本」と「西洋」という二項対立のなかではたらく翻訳の力学を扱うわけではない。酒井は、日本の知識人において（あるいは「西洋」の研究者においても）生じがちなこのような二項対立的な思考の構図を、次のように要約的に描き出している。

> 翻訳の仏―和、和―独といった対称性から言えば、「日本の思想」に対するものは「フランスの思想」であり「ドイツの思想」であろう。実際そのような対称で語られることはしばしばあるし、大学での学問分類ではフランス思想史・アメリカ思想史に並存する形で日本思想史があってもよさそうなものだ。しかし、「日本の思想」は「西洋」あるいは「欧米」との対称性に横滑りする。そして時には「日本の思想」は「東洋の思想」の代表のようになってしまう。[12]

このような思考は、例えば「外国文」「西洋文」の翻訳についてその「心得」を説く森田思軒や二葉亭四迷の言葉そのものにもすでに明確にあらわれている。そこでは「西洋文」が英語なのかロシア語なのかという決定的な差異は問題の枠組みのなかで消滅している。末松謙澄は「日本文と歐文」を比較するテクストのなかで、英、仏、独の翻訳について言及しているが、これらの差異は彼にとってはあまり問題にならず、ここでも「欧文」と「日本文」という二項対立の図式に回収されている[13]。西洋の諸言語と日本語の圧倒的な差異に直面したとき、西洋の諸言語間の差異が捨象されて図式化されてしまうことは、確かに理解できることではある。

ただ、あらためて意識化しなければならないのは、そのような図式的な理解の傾向が、歴史的に引き継がれ続けているということだ。この単純化された二項対立的思考は、西洋の諸言語によって、またその日本語への翻訳のさまざまな試みによって、日本語が劇的にそして急速に変貌を遂げていた時期の知識人のあいだで共有されていただけでなく、この時期の翻訳思想史、近代日本語形成を対象とするその後の研究者のあいだでも、多くの場合、基本的な前提とされ続けてきたのではないか。もちろん、例えば森鴎外や二葉亭四迷

11　酒井直樹『日本思想という問題』64-66 頁。

12　同書 65 頁。

13　『日本の翻訳論』79-81 頁、139-143 頁、149-152 頁。

の翻訳のように、ドイツ語やロシア語といった個別の言語圏の翻訳そのものが対象とされるとき、そこではもはや「欧文」という大きなくくりでとりあげられるわけではない。しかし、その場合も、それらの言語は「欧文」の個別のケースとして位置づけられているのであって、その意味では「日本文」と「欧文」という二項対立的思考は同じように保持されている。そこでは、ドイツ語やロシア語がヨーロッパの言語・文化のうちでもともと占めている歴史的に形成されてきた文化的・政治的コンテクストのなかで、それらの言語と日本語との関係が問われているわけではないのだ。

日本を関係の場の中心に据えた、翻訳における文化的・政治的力学の分析において重要なことは、その対象となる「文化的・政治的力学」にかかわる「西洋」が、歴史的・文化的・言語的差異が捨象された概念であるかのように語られるのではなく、「西洋」を構成する特定の文化圏・言語圏が、「西洋」のなかでのそれぞれの歴史的・政治的・文化的コンテクストにおいて、相互にどのような位置を占めているかという視点を包摂しつつ、「西洋」へのまなざしを分析することである。つまり、「西洋」を、そのなかである種の等質性が前提とされているような概念として考えるのではなく、その内部で相互に非対称的な力学がすでに作用している空間としてとらえるということだ。そのとき、「日本」と「西洋」という大きな枠組みでの非対称的な関係は、「西洋」のうちに言語間・文化間の非対称性の力学を包摂した、重層的な非対称性の場として思い描かれることになる。さらにまた、その重層性のうちには、日本が植民地主義的な力を近代化のプロセスで行使してきた、他のアジアの諸国とのあいだの非対称性も組み込まれている。

「日本」と「西洋」のあいだの力学は、そのような二項対立として想定された翻訳思想が展開してきた以上、その二項対立の図式そのものも考察の対象としなければならない。しかし、それとともに、実際に特定の言語の翻訳にかかわるものはその対象となる言語とのあいだの力学、そしてその言語が他の「西洋」の諸地域・文化・言語とどのような力関係にあるかを包摂した力学が、そこではともに分析されるべきだろう。

それとともにもう一つの重要な視点は、特定の言語の翻訳、とりわけ文学の翻訳においては、その言語圏・文化圏のもつ固有の特質が、翻訳者にとって（あるいは翻訳者が属するその言語圏の研究者・知識人にとって）きわめて大きな意味をもつということである。ドイツ文学の翻訳の歴史、フランス文学の翻訳の歴史、イギリス文学、アメリカ文学の歴史、ロシア文学の歴史等々は、それぞれ固有の伝統と特質をそれぞれに形成してきた。近代日本の翻訳思想史を語るためには、「西洋」の言語・文化の翻訳の歴史ではなく、それぞれ固有の伝統を備えた複数の言語・文化の翻訳が相互の力学のなかでどのような位置をもちつつ日本の思想・文化、そして近代日本語を形成してきたかを考える必要がある。

4.

このような研究は、必然的に地域・領域横断的研究とならざるをえず、さまざまな地域・言語・領域の研究者による共同研究として進めることを想定しており、本稿は、そのための序論的考察となることを意図している。

さしあたり、ドイツの地域研究者である私自身の研究領域に即していえば、日本とドイツという関係の軸については、とりわけ次の二つの主題が重要な考察の対象として考えられる。

（1）ヨーロッパ圏内での文化的力学という視点からの、ドイツ語圏翻訳思想の展開の再検討
（2）ヨーロッパ圏内での文化的力学を踏まえた上での、日本におけるドイツ語圏文学翻訳、ドイツ文化・文学受容の特殊性（とりわけ教養主義的伝統）

それに加えて、ヨーロッパ圏内での地域横断的研究として、
（3）日本における他の個別の欧米文化受容とドイツ文化受容との比較研究

そして、東アジア圏での日本との関係におけるドイツ文化研究に固有の問題としては、
（4）植民地統治下での近代化における日本を経由したドイツ受容という特殊性

といった射程を、「ドイツ」を軸とする場合に、この地域・領域横断的研究は含みもっている。本稿では、これらのうち最初にあげた主題に関して、考察されるべき論点とその枠組みを概観してゆきたい。

5.

翻訳という行為のうちに現れる言語間・文化間に働く力学を可視化すること、そしてまた、それによって個別の文化圏における翻訳がどのような力関係によって生み出されてきたかを分析することが、本研究の眼目である。そのような研究にとっては、地域性がかなりの程度捨象された（といっても欧米中心であることは免れ得ないのだが）翻訳理論・理論史ではなく、個別の文化圏・言語圏における翻訳思想史という場、あるいはそこでとりあげられるべき、当該文化圏の個別のテクストを考察の対象とすることが必要である。そのようなものとして、最もわかりやすいかたちをとっているのは、特定の言語圏における翻訳思想のアンソロジーである。ドイツ語圏についていえば、古典的なものとして知られているのが、『翻訳の問題 (Das Problem des Übersetzens)』と題されたアンソロジーである[14]。ここには、ヒエロニムスとルターのテクストも含まれているが、それ以外は 19 世紀から 20 世紀の（ほとんどがドイツ語で書かれた）テクストが収録されている。最初の 2 篇をのぞいて、19 世紀初頭のノヴァーリス、ゲーテ、シュライアーマッハー、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、A. W. シュレーゲルに始まり、ベンヤミン、ハイデガー、ガーダマーをへて、最後は 1961 年に書かれたスラブ文学の翻訳者のテクストで終わっている。

このアンソロジーは、初版が刊行された 1963 年という時点（改訂版は 1969 年）で、「翻訳の問題」に焦点を当てるためにどのようなテクストが選び出されているかということと

14　Hans Joachim Störig, *Das Problem des Übersetzens*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963; 2., durchgesehene und veränderte Auflage, 1969.

ともに、この時点で「翻訳」という問題圏が学問領域のなかでどのような位置を占めるかという自意識が浮かび上がっている点でも興味深い。現代の視点からすれば、これはドイツの翻訳思想にかかわるテクストのアンソロジーを編むというきわめて重要で興味深い企画と映る。しかし、この「序文」からは、例えば「ドイツ文学 (Germanistik)」や「哲学」という確固とした（そしてまた、この時代においては保守的伝統を保持した）学問領域に見られる強固な自己意識とは大きく異なり、この仕事の位置づけに対して、はるかに控えめな物腰が印象づけられる。編者は序文のなかで、「このように脇にそれた (abseitig) テーマのために、分厚い本が必要なのか？」と自ら問いかけ、すぐにその重要性を強調しようとするのだが、そこでも、翻訳というテーマが「以前よりも文学の世界や学問に重要視され、論じられるに値するものとなっている」、という弱々しい位置づけしか与えることができない[15]。翻訳とはあくまでも寄生的で副次的な存在でしかないという意識がそこにはある。

このことはまた、続く記述でも見てとれるように、翻訳が実用的な領域に属するものととらえられていたこと（それとともに、文学の翻訳であっても創造的・精神的な要素にあまりかかわらないととらえられていたこと）と深くかかわっている。「今日の世界における翻訳の意義」という見出しが与えられた箇所でも、実用的な視点からの翻訳の意義についての記述に終始していることが目を引く。

とりわけ、ドイツの教養市民層の伝統的価値観からすれば、実用性の領域に属するものに対して、より低い価値しか認められないという自意識が、このアンソロジーの「序文」からは浮かび上がってくる。しかし、このアンソロジーが（結果的に）ほぼ 19 世紀初頭以降のドイツの翻訳思想の集成となっているという事実は、実用性に対する否定的な価値づけの裏返しの現れでもある。というのも、ドイツの翻訳思想という言説を辿ろうとするならば、そこでは必然的に（他の言語に対置される）ドイツ語の特質や「ドイツ的」なものに対する意識とかかわらざるをえないからだ。「ドイツ的」なものに対する意識は、歴史的に「精神的」で「内面的」なものと強力に結びつくことによって形成されてきた。そして、その歴史的形成はほぼ 19 世紀初頭から 20 世紀前半に成し遂げられている。

6.

翻訳は実用性の領域に結びついているという意識から、翻訳思想のアンソロジーが自己卑下とも見えるような言葉を表しているとしても、その位置づけの枠組自体が「ドイツ的」な価値のうちにある。そしてアンソロジーのなかで選ばれているテクストもまた、そのような「ドイツ的」なものの歴史的形成と深くかかわっている。こういった視点は、とりわけ戦後の「ドイツ的」なものに対する強烈な自己否定の時代にあっては、かたちをとりにくいものであったかもしれない[16]。ドイツの外部から、そしてある程度の時間をおいて生まれてきたドイツ翻訳思想の研究では、「ドイツ」という歴史的空間が翻訳においてもつ特

15 Störig, *Das Problem des Übersetzens*, p. X.

16 Cf. Heinz Schlaffer, *Die kurze Geschichte der deutschen Literatur*, Hanser, München; Wien 2002.（シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』同学社、2008 年。）シュラッファーは、この最初の章で「ドイツ的」なものに対する戦後ドイツの拒否反応について言及している。

別な意味合いが明確に意識化されている。ここで念頭に置いているのは、アントワーヌ・ベルマンの『他者という試練――ロマン主義ドイツの文化と翻訳』（1984 年）と、三ツ木道夫のアンソロジー『思想としての翻訳――ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』（2008 年）および研究書『翻訳の思想史――近現代ドイツの翻訳論研究』（2011 年）である。いずれも 19 世紀初頭以降の翻訳思想を対象とする[17]。

ベルマンは「抑圧された翻訳の身分」、翻訳の「召使い的境遇」という従来の一般的な見方の枠組みを、翻訳に対する文化の「抵抗」として説明する。あらゆる文化のうちには自民族中心主義的な志向、純粋な「全体」を目指すナルシシズムが構造化されている。異質なものとかかわる翻訳は、本質的に文化と対立せざるをえない。その場合、翻訳は両義的な位置づけをとることになる。一方で翻訳は、文化の自己完結的な欲求にもとづき、（よりすぐれた）他文化を自己のうちに同化させようとする。ベルマンによれば、「古代ローマ文化、古典主義フランス文化、そして現代北米文化はそうした欲望発現の顕著な例である」。他方で、翻訳は他文化に対して自らを開き、対話し、混血、脱中心を目指す。この二つの方向は、いうまでもなく、翻訳における伝統的な二項対立的な立場にかかわるものだが、前者を「誤った」翻訳と位置づけつつ、後者における「翻訳の倫理学」のあり方を目指すのが、ベルマンの基本的な立場である[18]。

こういった翻訳に内在する両極的な力の交錯、とりわけ後者の翻訳の志向が最も顕著に現れている場こそが、ベルマンにとってはドイツ・ロマン主義の翻訳思想であった。ドイツ・ロマン主義という対象は、翻訳思想における単なるケーススタディなのではなく、「翻訳の倫理学」をめぐる反省的考察が「おそらく他国で対応する事例を見つけるのが困難なほど」集結して生み出されていた場なのである。（そして、おそらく近代日本も、そのような類まれなほどの翻訳思想が生み出されていった文化空間と見ることができるだろう。）

ドイツの翻訳思想が一つの類型をなすかのように単純化することはできない。それでもなお、ベルマンがロマン主義のドイツの翻訳・言語思想のうちに見ていたのが、「他者という試練」をたどりながらドイツとしての文化形成を行う特質だったということができるだろう。ドイツの翻訳思想における異質なものとの対峙という特質をさらに明確に考察の軸としているのは、三ツ木道夫である。ドイツ翻訳思想の日本語に翻訳されたテクストのアンソロジー『思想としての翻訳』は、まえがきでも述べられているように、ドイツ語圏の翻訳論として最もよく知られているベンヤミンの「翻訳者の課題」を中心に据えて、ゲーテからヘルマン・ブロッホにいたる翻訳思想をたどる構想で編纂されている。「本書は、むしろベンヤミンの翻訳論の背景となっている翻訳思想の（ドイツ的な）特色、およびその歴史的な関連が理解できるように配列した。」[19] ここで言及されている「ドイツ的」な翻訳思想の特質とは、一言でいえば、異質なものをあえてそのままとりこもうとする姿勢である。つまり、翻訳における伝統的な二項対立に即していえば、翻訳先の読者にとっての「自

17　アントワーヌ・ベルマン『他者という試練――ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房、2008 年 (Antoine Berman, *L'épreuve de L'étranger. Culture et traduction dans l'Allemagne roantique:* Herder, Goethe, Schlegel, Novalis, Humboldt, Schleiermacher, Hölderlin, Édetions Gallimard, Paris, 1984.)。三ツ木道夫［編訳］『思想としての翻訳――ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社、2008 年。三ツ木道夫『翻訳の思想史――近現代ドイツの翻訳論研究』晃洋書房、2011 年。

18　ベルマン『他者という試練』12, 14-15 頁。

19　『思想としての翻訳』3 頁。

然さ」を志向した「自由」な翻訳ではなく、オリジナルのテクストの言語と文化そのものを、その「異質性」を包摂しながら「忠実」に伝達しようとする翻訳の立場ということになる。ベンヤミンのテクストを単純に翻訳における方法論の問題として読むことにはほとんど意味がない[20]。しかし、少なくとも、原文の意味を伝達するという実用性の領域から完全に離れ、「純粋言語」という理念的なものへと向かう言語の運動として翻訳を位置づけるときに、「行間翻訳」という究極の逐語訳を理想として掲げるベンヤミンの言葉からは、「忠実」な翻訳を志向しているかのような方向が読みとれる。翻訳の場に実践的にかかわるものにとっては、「忠実」を志向することは、翻訳が不自然でぎごちないものとなるというリスクをともなう。いくつかのドイツの翻訳思想のテクスト（例えばシュライアーマッハー）からは、「忠実」ではなく「自然さ」こそが翻訳実践における主流であることが見てとれる。しかし、それにもかかわらず、理論の場ではあえて「忠実」への志向が支持される傾向が顕著に見られる。このことは確かに、ドイツの翻訳思想に特有の現象であるということができるだろう。

7.

ドイツの翻訳思想として列挙されるテクストのうち、この傾向を最も顕著に示しているのが、シュライアーマッハーの翻訳論として知られる「翻訳のさまざまな方法について」である[21]。このシュライアーマッハーのテクストは、翻訳における「忠実」と「自然」という伝統的な二項対立を次のように定式化していることでよく知られている。「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす、このどちらかしかありません。」（38）シュライアーマッハーのテクストからは、この問題が翻訳にかかわる人々の間ですでに論議され続けてきた問題であること、そしてレトリックのうえでは、この二つの方法は対等な選択肢であるかのように見えるけれども、実際には「異質なもの」を読者に感じさせる、オリジナルの言語に忠実な翻訳の方法は、「一笑に付されてしまう」（48）ものであると受けとめられていることがわかる。それにもかかわらず、シュライアーマッハーはあえて「忠実」な翻訳の必要性をここで主張しているわけだが、それは単なる翻訳の方法論の問題ではないことに注意しなければならない。忠実な翻訳を彼が支持するとしても、それは決して翻訳の方法における一般論として主張されているのではなく、ドイツ語における翻訳の

20　Cf. Hiroyuki Yamaguchi, “The Translator’s Task in the Context of Translation Studies”, in: *Tradizione, Traduzione, Trasformazione*, Tokyo University of Foreign Studies, 2015, pp. 5-13. ベンヤミンの「翻訳者の課題」は、ベンヤミン研究という枠組みのなかで、「言語思想」や「神学」というコンテクストから位置づけられることが多い（例えば、柿木伸之『ベンヤミンの言語哲学』平凡社、2014 年）。翻訳理論の概説的テクストやアンソロジーでも、ベンヤミンの言語論は必ずとりあげられるが、ベンヤミンの思想的コンテクストを離れて論じることにはどうしても限界がある。そのなかで、アントワーヌ・ベルマン『翻訳の時代――ベンヤミン「翻訳者の使命」注解』岸正樹訳、法政大学出版局、2013 年は、翻訳理論家によるきわめて刺激的な論考である。ベルマンにとって、ベンヤミンのこのテクストは集中的に取り組まざるをえない対象であったということが強く感じとれる。

21　日本語の翻訳は、三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』に収録されている（25-71 頁）。以下、本文内の引用箇所はこの邦訳のページ数によって示す。

あり方として提起されているのである。「母国語において異質なものが表現されねばならないというこの困難な課題」を強く意識しながら、シュライアーマッハーは次のように述べる。「この翻訳方法がすべての言語において等しく富み栄える、というわけではありません。そうではなく、古典的な表現にがんじがらめになった挙げ句、おのが外部の一切を退けるなどということのない言語においてこそ、この方法は繁栄するのです。」(50) これは、ドイツ語とドイツの文化の歴史的位置づけを強く意識したうえでの、逆転の主張である。「わが国民に与えられた天命が独特なものであることがわかる内的必然性、これが私たちをみな翻訳へと駆り立ててきたのです。」(68) 異質なものをドイツの文化のうちに取り入れることによって自国の文化を豊かなものにすることができるという発想は、自らにとっては「異質」な他者の文化がより優れたものであると認めていることを前提としている。

> 異質なものに対する私たちの敬意、また私たちの仲介者的な本性ゆえの定めとは、地理的にも心情的にもヨーロッパの中心に保たれねばならない大いなる歴史全体に向かって、異邦の学芸の精華と自国の文化とをドイツ語において統合することなのです。つまり、私たちの言語を補助として、さまざまな時代が生み出してきた精華をすべての人が純粋かつ完全に享受できるようにすること、これは外なる存在 (Fremdling) にだけ可能なのです。(68)

ここで想定されている「異質なもの」とは、揺るがしようのない源泉としてのギリシア・ローマの古典文化、およびその直接の継承者であるイタリアであるとともに、なんといってもフランスであった。ベルリン王立科学アカデミーの講義としてこのテクストが語られた 1813 年は、ナポレオンのドイツ支配の最後のときにあたり、同じ年のうちにナポレオン軍はライプツィヒでの「諸国民戦争」に破れることになる。数多くの領邦に分かれていた「ドイツ」を名目上統合していた神聖ローマ帝国が、フランス軍の侵攻によって 1806 年に消滅するという事態にあって、ドイツの知識人のうちにナショナリズム的な意識が明確に形成されてゆく。ドイツの言語、文学、そして翻訳という領域は、「異質なもの」によって「ドイツ的」なものが明確に形成されてゆく場となった。その意味で、1813 年に講義されたシュライアーマッハーの「翻訳の様々な方法について」は、1807 年から 1808 年にかけてフランス軍占領下のベルリンでのフィヒテの連続講義「ドイツ国民に告ぐ（ドイツ国民に向けての講演）」の言語思想と密接な関係にある。「ドイツ国民に告ぐ」では、フランス語に対するドイツ語の優位性が執拗なまでに強調されているが、このことはもちろんフランス文化の優位性に対する一般的な意識が反転したものにほかならない。文化的コンプレックスは、ナショナリズム的意識のなかで簡単に優越的言説に反転する。「ドイツ国民に告ぐ」もまた、ナショナリズムのコンテクストにあるドイツ翻訳思想のテクストにつらなるものとして読むことができる。シュライアーマッハーにとりわけ顕著に見て取れる「異質性」への志向と、このことを特質とするとドイツの翻訳思想は、決して単純な「翻訳方略」の二項対立としてとりあげられるものではなく、ヨーロッパ文化圏のなかでの、とりわけフランスとのあいだの文化意識の力学というコンテクストにおいてはじめて意味をもつものということができる。

8.

このシュライアーマッハーのテクストを英語圏に紹介したのは、少なくとも一定度の広がりをもった読者に受け入れられるかたちで紹介したのは、1977年に出版されたアンドレ・ルフェーブル編訳によるドイツ翻訳思想テクストのアンソロジー *Translating literature : the German tradition from Luther to Rosenzweig* が最初だと思われる[22]。文学翻訳の理論家として広く知られるとともに、比較文学の領域でもとりわけドイツ文学に深い関心と知識をもつルフェーブルが、彼のキャリアの比較的初期の段階で取り組んだ仕事である。ルフェーブルはベルギー出身だが、おもに英語圏で活動していた。ルフェーブルはこのアンソロジーの序文で、伝統とは、同じ目標、少なくとも類似の目標を共有する数多くの人々によって、長い年月をかけて意識的に形成され、打ち立てられるものであることを強調している。ルフェーブルは、このコメントつきのテクスト集が「ドイツにおける文学翻訳の伝統の展開を概観しようとする」ものであることを表明し[23]、そしてアンソロジー全体も、「伝統の確立」としてまとめられた第一部と、「内部の伝統批判」を掲げる第二部から成り立っている。

ルフェーブルは、ラドニツキーによる学問理論的な視点からの分類に依拠しながら[24]、ドイツの翻訳思想における伝統の「先駆者」「開拓者」「師（マスター）」「弟子」を想定し、第一部では「先駆者」としてのマルティン・ルターと17世紀ドイツの文法学者ユーストゥス・ゲオルク・ショッテル、「開拓者」としては、18世紀ドイツ啓蒙主義の時代の文学者であり、フランス古典主義志向であったヨハン・クリストフ・ゴットシェート、彼の論敵だったチューリヒのボードマーとブライティンガー、そして18世紀ドイツを代表するレッシングとヘルダーがとりあげられている。そして、「師」とされているのは、ゲーテを筆頭に、シュライアーマッハー、フンボルト、そしてノヴァーリスとシュレーゲル兄弟ら初期ロマン派の詩人たちである。シュライアーマッハーのテクストは、第一部の最後に置かれている。第二部「内部の伝統批判」では、ドイツ翻訳思想の伝統における「弟子」がとりあげられていることになるが、そこには、ヤーコブ・グリム、ニーチェ、ショーペンハウアー、ベンヤミン[25]、ヴィラモヴィッツ・メレンドルフ、ルドルフ・ボルヒャルト、ローゼンツヴァイクといった19世紀中庸・後半から20世紀前半の思想家たちのテクストが含められている。

こういった思想家とテクストの系列によって、ルフェーブルはドイツ的な「伝統」の流れと変奏を提示しようとしているわけだが、しかし、その「伝統」が実際どのような概念で語られるものであるかを、ルフェーブルはこの短い序文のなかで解き明かそうとはしていない。だが、伝統とみなされているものがテクストの思想の連鎖によって成り立つもの

22 André Lefevere, *Translating literature : the German tradition from Luther to Rosenzweig*. Assen : Van Gorcum, 1977.

23 Ibid. p. 1, 2.

24 Cf. Gerard Radnitzky, *Contemporary Schools of Metascienece*, Copenhagen: Scandinavian University Books, 2nd ed., 1970.

25 ベンヤミンの「翻訳者の課題」からはたった1頁の抜粋で、The Concept of the Third Language というタイトルが付けられている (Lefevere, *Translating literature*, p. 102)。「翻訳者の課題」の英語圏における受容については、cf. Susan Ingram, “The Task of the Translator”: Walter Benjamin’s Essay in English, a *Forschungsbericht*, in: *TTR : traduction, terminologie, rédaction*, vol. 10, n° 2, 1997, p. 207-233. (https://core.ac.uk/download/pdf/59325868.pdf)

であることを、シュライアーマッハーによる二つの翻訳の方向性についてのよく知られた言い回しや、ベンヤミンのテクストへと流れ込む系譜についても指摘するルフェーブルの思い描くイメージは、アントワーヌ・ベルマンや三ツ木道夫が提示しようとする方向と基本的には一致しているといえるだろう。

「異質なもの」をそのまま受けとめることへの志向をドイツの「伝統」のうちに見てとるとすれば、このことはまた、他者の文化を受け入れるための翻訳がドイツにおいてきわだって展開を見せたこととも結びついている。この量と規模の問題自体が、ドイツの翻訳の伝統の一部をなしているということはロマン派以降の作家や思想家たちが共通して意識していたことであり、だからこそルフェーブルも次のようなノヴァーリスの言葉を、このアンソロジー全体のモットーとして掲げている。

> われわれドイツ人は長いあいだ翻訳し続けてきた。翻訳の欲求は国民的な特徴であるようにも見える。なぜなら、重要なドイツの作家で、翻訳をしたことがない者、自分のオリジナルの作品でもつのと同じ誇りを自分の翻訳に対してもつことがない者など、ほとんどいないのだから。

こういったイメージは、すでに見てきたように、シュライアーマッハーのテクストのうちにおそらく最も強烈な谺となって響きわたっている。このようなドイツ的特質は、しかし、ドイツの思想史的潮流をたどる場合はともかくとして、世界的な展開を見せる（といっても、やはり欧米中心の展開であることは否定できないのだが）トランスレーション・スタディーズの大きな流れのなかでは埋もれてゆく。イギリス出身であり、ウィーン大学で活動する翻訳理論家・翻訳者のメアリー・スネル＝ホーンビーは、ドイツ語圏での翻訳思想と現在の翻訳理論の動向について熟知しているが[26]、トランスレーション・スタディーズの展開におけるいくつかの重要な「転換点」を歴史的にたどる彼女の著作の最初の章で、このルフェーブルのドイツ翻訳思想のアンソロジーから話を始め、そしてルフェーブルとは別の意味で、「先駆者」としてのシュライアーマッハー、ゲーテ、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに言及して、とりわけシュライアーマッハーの翻訳論に沿って話を進めていく[27]。しかし、それはむしろ、オリジナルへの「忠実」と読者にとっての「自然さ」（その意味での「自由」）という、翻訳における古典的な二項対立の図式をまず示すことによって、この著作全体の主題である翻訳理論における「転換」の最初のステップ（1970 年代）を描き出すためである。トランスレーション・スタディーズにおける複数の「転換」を描く翻訳理論史のなかでは、ドイツの翻訳思想に固有の歴史的特質――なぜとりわけ 19 世紀ドイツにおいて「異質なもの」に対して意識的に受容的な志向が展開していったのか――は、パラダイムの転換として叙述される理論の展開の背後で、ともすれば語られない要素として残されてゆく。

26　ドイツ語圏の比較的現代の翻訳研究の動向については、cf: Mary Snell-Hornby, Linguistic Transcoding or Cultural Transfer? A Critique of Translation Theory in Germany, in: Bassnet/Lefevere, *Translation, History and Culture*, pp. 79-86.

27　Mary Snell-Hornby, *The Turns of Translation Studies*: *New Paradigms of Shifting Viewpoints?*, John Benjamins Publishing Company, 2006, p.5.

9.

トランスレーション・スタディーズにおけるさまざまな理論的視点の「転換」のプロセスという枠組みを基本的に受け入れたうえで、翻訳における「忠実」と「自由」という二項対立の最も明示的なモデルとしてしばしば提示されるシュライアーマッハーの思考を、本来のドイツの歴史的コンテクストのなかでとらえなおすことは、理論史のより精密な理解のためにもきわめて有効であるはずだ。ヴェヌーティが *The Translator's Invisibility* のなかで、シュライアーマッハーを引き合いに出したのもまさにそのような意識にもとづくものである。ちなみに、同化的翻訳と異質化翻訳という概念が提示される最初の章 “Invisibility” では、そのことは明示的にあらわれておらず、第３章 “Nation” で集約的にとりあげられる[28]。英語圏で支配的な同化的翻訳のうちにはたらく「翻訳の暴力」と、その結果として生じている翻訳者の文化的・社会的・経済的な「不可視性」（目に見えない存在となってしまっていること）の状況に対する批判をおこなうことが、この著作の第１章の主眼である。ここで同化的翻訳と異質化翻訳という対概念として提示されているものは、あくまでも不均衡な文化的力学が現象としてあらわれたものであって、単に翻訳の「ストラテジー」を機能的に説明するものではない。

同じように、シュライアーマッハーにおいてあらわれる二項対立的に示されている翻訳の二つの「方法」についても、彼が掲げる「異質」なものへと向かう翻訳そのものが「方法」として問題となるというよりも、むしろその「方法」を唱道する彼の思考がどのような力学によって生み出されているのかに目を向けることが重要である。

ヴェヌーティにとっては、彼を取り巻く英語圏の翻訳状況のなかで、ながらく特に意識化されることなく作用していた「翻訳の暴力」を描き出してみせることが、彼の著作の出発点となっている。しかし、このことは英語圏だけに限られることではなく、彼自身がより一般的な問題性へとテーマを拡張している。

同じように、この枠組を日本の近代化の過程における翻訳の問題に当てはめて考えることは、もちろん十分に有効である。優勢な文化である英語圏への翻訳が「同化的」になるのとは対照的に、西洋を先進的文化として見上げていた日本への西洋のテクストの翻訳は、起点言語の文化や言語的特質を重視する「異質化」の傾向を強く帯びる――こういった指摘は、ヴェヌーティの主張する理論的枠組に沿うものであり、また現象としてもそのような傾向は概ね確認できるようにも思われる[29]。しかし、ここにはこれまで一般的にあまり顧慮されてこなかった二つの視点をさらに意識的に加える必要があるだろう。

一つは、個々の文化圏にかかわる翻訳の伝統（アメリカ文学、イギリス文学、フランス文学、ドイツ文学、ロシア文学それぞれの翻訳の伝統として形成されてきたもの）が、相互にその伝統の差異を共有し、意識化することによって、その総体としての「西洋」という包括的

28 Venuti: *The Translator's Invisibility* (2008[2]), pp. 83-99.

29 もちろん、日本の近代化以降のすべての翻訳についてそれが当てはまるわけではない。日本の翻訳史のなかで時代区分を考える必要がある。Cf. Hiroyuki Yamaguchi, „Homogenisierung des Fremden: Drei Phasen der literarischen Übersetzung in Japan“, Institut für Übersetzungsforschung zur deutschen und koreanischen Literatur. 25. Jahrestagung. In Zusammenarbeit mit dem Institut für deutschsprachige Kultur und Literatur der Seoul National University, 2018.

な概念をとらえなおす視点である。このことは、伝統的な各国文学の制度的体制はもちろんのこと、少なくとも個人の比較文学の枠組みをも越える共同研究を前提とする。

そしてもう一つは、「西洋」という包括的概念によって捨象されていた西洋内部の非対称的な力学を、「西洋」と「日本」とのあいだの非対称性の構造のうちに、さらに複合的に組み込む視点である。

このことは、ドイツとの関係でいえば、大正期以降の教養主義における完全なドイツ志向のまなざしとそれに対応する翻訳のあり方が、構造的には、ヨーロッパ内部でドイツが置かれていた力学（そのなかでの後進的な意識とそれが反転した優越意識の相克）および翻訳の思想と、複合的にかかわりあうということを意味している。現代の日本の視点からのドイツ翻訳思想の展開の研究は、このようなコンテクストのなかでさらに特別な意味を帯びることになるだろう。

Relationships with “Foreign” Languages in Thought on Translation in Germany and Japan: An Introductory Consideration for Studies on Complex Asymmetrical Cultural Dynamics in Translation

Hiroyuki YAMAGUCHI

Summary

This paper proposes a framework for joint intercultural and interdisciplinary research on translation that focuses on cultural dynamics among “western countries” and Japan as seen since Japan’s modernization.

A number of Japanese intellectuals have been bound to the dichotomy of “Japan” and “the West,” comparing Japan not with individual western countries but with “the West” as a whole. In such a dichotomic understanding, individual linguistic and cultural differences among western countries tend to be ignored, and only the unbalanced power dynamics between “Japan” and “the West” are discussed with significant frequency. Unbalanced power dynamics also exist, however, among western countries, and I believe that it is important to consider also such dynamics among western countries, as well, in order to meaningfully discuss thought regarding translation.

For example, in order to discuss thought regarding translation of German texts in Japan, which played a crucial role in the process of Japan’s modernization, it is important to consider also the fact that a number of 19th century Germans were conscious of the backwardness of their own nation in comparison with other western nations. The tendency to retain “foreign” elements of another (dominant) culture in translation, often considered to be a “foreignizing translation strategy,” has been prominent not only in Japan but was also so in 19th century Germany.

The tendency to maintain foreignness in translation thus should be discussed not in a single asymmetrical relationship between a “western” country and Japan but, rather, in a more complex framework of asymmetrical relationships among “western” countries and Japan.

キーワード
翻訳理論　トランスレーション・スタディーズ　ドイツ翻訳思想　日本翻訳思想

Keywords
translation theory　Translation Studies　Thought on Translation in Germany
Thought on Translation in Japan